

2022年1月9日 説教「食べ物に力を得て」

列王記第一 19章 1~8節

今朝は久しぶりに列王記第一の学びに戻ってきました。エリヤはケリテ川のほとりから地中海沿いのツアレファテに移され、やもめ親子と関わった後、改めてアハブ王の前に出されて、バアルの神を奉ずる預言者450人との対決をしました。主なる神の助けで、一人きりのエリヤは勝利を得ました。バアルの預言者たちの叫びや願いは聞かれず、エリヤの祈りは用いられて祭壇に火がつけました。さらに、かつての預言通りに雨も降りだしたのです。

1. アハブとイゼベルの仕返し (1~2節)

- ①アハブはイゼベルに (1)「アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたことを残らずイゼベルに告げた。」アハブ王(紀元前874年~)は偶像神バアルを信奉していました。一方、エリヤは主なる神からの促しをいただき、雨が降らないことを預言し、それは成就しました。時がたち、神はエリヤに力強く働かれました。アハブの加護の下にあったバアルの預言者たちは、カルメル山において450人も多勢をもってエリヤに対しましたが、あえなく一人のエリヤに敗れたのです。その結果、エリヤは神の権威をもって、偶像神信仰を推し進める預言者たちの裁きを実行したのです。それは容赦ないものでした。アハブが口を出せないほどの権威が実感されたのでしょうか。アハブはすくすくと退いた後、それら一連の出来事を妻のイゼベルに告げました。
- ②イゼベルは使者を (2)「すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。」アハブ王がイゼベルの所に向いている様子を見ても、アハブは妻イゼベルの頭があがらないような関係でした。イゼベルが国の働きについても、判断を下すこともあったようです。彼女は、アハブ王からの報告を聞くと、使者をエリヤの所に送っています。アハブの権限で送ったのではなく、イゼベルの判断でなされているのです。
- ③イゼベルの脅迫 (2)「『もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。』」イゼベルの伝えてきた内容は尋常ならざるものでした。イゼベルの決意は堅く、なんとしてもエリヤのいのちをとるといふのです。もしこれを実行しないならば、神々が自分(イゼベル)を幾重にも罰するようにといふものでした。450人のバアルの預言者達が死んだように、今度はエリヤの命をとるといふ脅迫でした。

2. 逃げるエリヤ (3~4節)

- ①エリヤは逃げ (3)「彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去



った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、「エリヤはイゼベルの使いの言葉を聞くと、恐れおののきました。そして、なんとか命がとられるのを免れるために、そこを立ち去ったのです。イエス様を知る新約時代の者たちは、そんなことは覚悟の上でなかったのかと思うかもしれません。一方では、エリヤも怖がりやなんだと親しみを覚えるかもしれません。彼はユダでも南の方にあるベエル・シェバまで逃げ延びました。そこで、彼は従者の若者を残しました。

- ②荒野へ一日の道のり (4)「自分は荒野へ一日の道のりに入って行った。」そして、ベエル・シェバよりさらに南の荒野への道を進んでいきました。歩いて一日かかるほどの距離を進んで行ったということです。おそらくは直線距離でいえば、せいぜい50キロメートルほどでありましょう。
- ③えにしだの木の陰 (4)「彼はえにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。『主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。』」エリヤは歩く途中で、えにしだの木の陰に座ったのです。えにしだの木はマメ科の植物で降雨量の少ない砂漠地帯にも育ち、黄金色の美しい花を咲かせました。彼は主なる神に嘆きの祈りをしました。自分の死を願いつつ、「主よ。もう十分ですから、命を取ってください。私はアブラハムやモーセのような先祖の信仰者たちのようなわけにはいかない者なのです。」

3. 食べるエリヤ (5~8)

- ①起きて食べよ (5)「彼がえにしだの木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、『起きて、食べなさい。』と言った。」エリヤはついにえにしだの木の下で横になって、眠ってしまいました。それほどに疲れてもいたのでしょうか。すると、ひとりの御使いが彼のところにやってきたのです。我々はクリスマスの記事の中で、マリヤやヨセフに現れた御使いの記事を読みました。大事な時に御使いは用いられるのです。御使いはエリヤにさわって、「起きて、食べなさい。」と言ったのです。
- ②焼かれたパン (6)「彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水の入ったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。」エリヤは御使いの方を見ました。すると、食べ物が用意されたのです。焼け石で焼いたパンとありますが、石焼き芋を知っている私たちには想像しやすいですね。焼いたパンと壺に入った水。エリヤは、食べ、飲んだのです。そして、もう一度横になったのです。
- ③神の山ホレブへ (7~8)「それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、『起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから。』』と言った。そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を

得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。」おそらくはもうしばらくは眠ったのでしょう。その後、主の使いは再びやってきて、彼にさわって声をかけたのです。「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから」。エリヤは促されるままに、起きて、食べ、飲んだのです。そして、この食べ物を食べて力をもらい、もう一度歩きだしたのです。四十日四十夜歩き続けました。そして、シナイ半島にあるシナイ山にたどり着いたのです。神の山ホレブという場所です。そこまでたどりつくことができたのです。

《結論》

今朝は久方ぶりに列王記第一からのエリヤの生涯の学びです。カルメル山でのバアルの預言者達との対決はエリヤの勝利でしたが、それでことが終わったわけではありませんでした。アハブは妻のイゼベルに一連の出来事を伝えると、イゼベルは怒り心頭で、エリヤに仕返しをはかることになりました。それを知ったエリヤは逃げます。荒野からホレブの山に向かうエリヤの心の内は苦しみで一杯でした。主に向かって、「私のいのちを取ってくださいと祈り叫ぶほどでした。

そんなエリヤに、主は御使いを遣わして励ましてくださいました。えにしだの木陰の下に眠るエリヤに、「起きて、食べなさい」と言い、焼け石

で焼いたパン菓子と水を備えてくださったのです。

こんな記事を読むと、ある人は聖書なのだから、エリヤにはもっと靈的な励ましがふさわしいのではないかと思われるかもしれませんが、そして、あのお言葉を示されるかもしれません。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイの福音書4:4)。イエス・キリストが引用された言葉ですね。このようにあるのに、どうして胃の腑のためのパンなのだという意見でありましょう。

しかし、ここでは主なる神は、一度だけでなく、二度までも眠るエリヤを起こして、「起きて、食べよ」と言われて、食事を与えておられるのです。これはもう、確実に主なる神の御意志であるとわかるのです。体力的にも靈的にも疲れ切ったエリヤに、主はパンと水を繰り返し備えてくださっています。

それはまず神の山ホレブに向かうエリヤに、主は目的地に着くための体力を与えようとされているのです。ここで、主なる神は私たちの現実の必要を無視されないことを示してくださっています。それに、マタイの福音書4:4にしても「人はパンだけで生きるのではなく」とあるのです。人は口を糊するパンで生きる存在で

あることをはっきりと言明してくれていたのです。

また、主の祈りを思い出してください。その祈りのなかには、「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」とあったのです。イエス・キリストの祈りの手本のなかにも、私たちが日ごとにいただく食事を祈り求めることを許すばかりか、重要な祈りであると教えられているのです。

この後にエリヤは主との対話へと進ませられていきますが、主はこの体をもって生きる私たちの現実的な必要をいつも覚えてくださっていることを知りたいのです。格別、年頭にあたり今朝の聖書箇所を巡り合った私たちは、この年も「日ごとの糧をお与えください」と心をこめて祈るようにと導かれていると思うのです。また、この国はもちろん世界に生きていて、この現実的な食糧の必要としている方々への祈りもしていきましょう。

讚美歌 454 「うるわしき朝も、静かなる夜も、食べ物、着物も、下さる神さま」とうたいつつ、エリヤを養ってくださった主が、2022 年を生きる、私たちをも養ってくださると信じていきたいのです。